

まなびの広場
稲進会
教室通信

彩色いろいろ

「子どもへの願い②」

先月に続き、心理学者アルフレッド・アドラーが唱えた社会に有用な人の位置づけについて。

アドラーは右の図のように人の立ち位置を4つに分類しました。

『活動性』…文字通り活動的か否か。

『共同体感覚』…アドラー心理学のキーワードです。

共同体とは、二人以上の人間の間で構成されるもの。
共同体感覚とは、協力関係を維持していくためにという意識をもとに作られる感覚。



参考:『アドラー心理学入門』

<右上>→共同体感覚、活動性共に高い人:社会に有用な人。

<右下>→共同体感覚は低いが、活動性が高い人:支配的な人、独裁者的とも言えます。

<左下>→共同体感覚、活動性共に低い人:誰かが自分のために何かをしてくれると思っている(ゲッター)。またはあらゆることから逃げ続ける人(回避者)となる。

<左上>→この世に存在しない。

何とも印象的なのが、左上の分類にあてはまる人が存在しないことです。共同体感覚が高いのに活動性に乏しいという人はいないのです。またいくら活動性が高い人、アグレッシブな人であろうとも、共同体感覚が低ければ、自分さえ良ければという生き方になってしまいます。

先月触れたように、親が子どもに願うこと「社会の役に立ち、経済的にもある程度は豊かな人生に」を実現させるために欠かせないのは、子どもが『共同体感覚』を身につけておくことです。

共同体と言っても、大げさなことではありません。アドラーは、共同体を二人以上の関係性の中で作られると言っています。親と子、先生と生徒、友達同士…、共同体は日々のあらゆる場面で形成されています。目の前の人と協力関係を作るために、目の前の人は何を望んでいるのか、自分に何をしたいのか、自分は相手のために何ができるのか、そうした意識を持てるかどうかです。

こうしたことをふまえると、大人が子どもに向かってよく言う

「自分のために勉強しなさい」「勉強しておかないとあなたが困るのよ」

という言葉は、共同体感覚にはつながらない、…のでしょうか？次回に続きます。

教室の風景

続けること

私は学生時代に草月流のいけばなと出会いました。いけばなも初めはテキストを見ながら基本を習い、そして少しずつ自由な段階に移っていくという、レゴと同じような道をたどっていきます。自由と聞けば制限がなく解放された感じがしますが、決してそうではなく自由だからこそ自分を試されているような気がして大いに悩むことになるのです。そんな時はレゴと向き合っているときのみんなの気持ちがよくわかります。

納得のいく出来にちょっと誇らしい気持ちになってみたり、どうしても上手くいなくて情けなくなったりをくり返しながらか、気がつけばいつの間にかもう 20 年。この年月で得られたものはいけばなの技術だけではなく頑張ってきたという誇りのようなもの。

そういえば最近、某テレビ番組でいけばな査定というのをやっています。同じような花材を使っても作品は様々で、それぞれのイメージで独自の表現をしているところはやっぱりレゴと一緒に！！ですが両者には決定的に違っている所があります。一度切ってしまうとやり直しがきかないのがお花、レゴなら何度でも調整できます。だからみんなにはたくさん試してほしいんです。

「とりあえずやってみる」

きっかけは何であったとしても自分にできそうな所から「やってみる」ことで何かが変わっていく気がしませんか？

どんなことでも、それを乗り越えた人にしか味わうことのできない充実感がありますよね。どうにかしてそれを子どもたちにも伝えたい。それが実感できれば、あきらめずに頑張る原動力になると思うからです。みんなにも「これだけは自信がある！」と思えるような何かがきつとあるはず。今すぐじゃないかもしれないけど、いつかそんな何かに出会えることを祈って……

インストラクター 清水倫子

恐竜大特集！

ハロークラス・ダクタクラス 共同製作会課題作品『恐竜』のご紹介

